

つ

いこのあいだまでわたしが滞在していたイスラエルのテルアヴィヴは、地中海の東の端にあり、美しい砂浜がどこまでも続いている、人口60万ほどの都市である。海辺をずつと南までいくと、日夜激しい緊張が続いているパレスチナのがザ地区となり、逆に北の方へ進んでいくとレバノン領となつて、巨大な難民キャンプが控えている。もちろん、そのどちらにもイスラエル人は足を向けることができない。彼らが泳いだり、BBQをして遊んでいられるのは、車でずつ飛ばせば4時間ほどの、南北の距離の間だけである。

テルアヴィヴの中心にはシェインキン通りという繁華街があつて、若者文化がまさに咲き誇っていた。洒落たカフェがあり、CDやコミックスの専門店がある。小さなアークセサリーの店が軒を並べ、ジュ

ース屋やクレープ屋の前に行列ができていた。その間を、チェ・ゲバラのTシャツを着た髪の長い青年や、頭を丸剃りにした少女が歩いている。東京なら下北沢、ニューヨークなら聖マルクス通りに似て、サブカルチャーの最前線がここには実現されている。通りの基調となつている色彩は、2004年現在、ピンクと空色である。

「コイノマホオ」というそのブティックは、通りのちやうど真ん中あたりにあつて、あたかもイスラエル中の女の子の、ピンク色のファッションの元締めといった雰囲気気を醸し出していた。客たちはすでにピンクの服を着てここに集い、さらなるピンクの服を買い求めている。わたしの注目を引いたのは、壁面に一面にわたつて描かれている日本の少女漫画のキャラクターだった。彼女は白とピンクの、浴衣とも柔道着ともつかないコスチ

ュームを着て、颯爽とした身振りをを見せている。その下にはレタリングされた字体で「戀の魔法」と記されていた。もちろん日本語である。

日本の漫画とアニメが世界を席捲するようになって久しい。わたしはその前年の秋には、ウィーン大学の構内で、日本の少女漫画をあしらったサー

イスラエルの魔法

クル募集の立看板を目撃している。そしてそれは、中近東の小国でユダヤ人の若い女性をも魅惑している。2年にわたる兵役を勤め上げ、銃をもちや担わなくともよくなった彼女たちにとって、それは文字通り魔法のように魅惑的なものなのだろう。そろそろ日本の美学を「わび・さび」から離れて、再検討すべき時節が到来しているのかもしれない。●

よもたいぬひこ
四方田犬彦

明治学院大学教授

をちこち散歩

@Tel Aviv